

中国キリスト教と政府の宗教政策  
—浙江省事件を中心として—

黄 大 衛

VISIO No.45

九州ルーテル学院大学  
Kyushu Lutheran College

December 2015

# 中国キリスト教と政府の宗教政策

## —浙江省事件を中心として—

黄 大 衛

Religious Policy of Chinese Christianity and Government:  
Zhejiang Incident as the Center

Dawei Huang

### 1. はじめに

筆者は、これまで中国キリスト教の現況に2つの論稿を発表した<sup>1</sup>。それにおける主要な論点は、以下の3点である。

- ① 公認教会と非公認教会の存在
- ② 中国におけるキリスト教信仰の実態
- ③ 政府の宗教政策と信仰の自由

本稿は、これらの先行研究に加えて、新たに現地調査を実施したものである。2015年8月10日～8月17日の北京、上海地区における中国教会を訪問した。今回、北京ではキリスト教教会の訪問に加えて、中国宗教界全般を管理する政府部門である国家宗教局への訪問も許可されたことを付言しておきたい。

当初は、浙江省の温州の訪問を検討した。2014年4月27日、温州の公認教会の一つである三江教会の大きな教会堂が完成目前に政府によって強引に取り壊され、それを機に、教会堂の破壊と十字架の撤去・移転が続いた。ただ同年8月上旬にはこのような破壊活動が一時的に停止されたといわれた。筆者は事件のその後の推移を確認しなかったため、2015年6月1日、温州への訪問を中国の教会本部に打診したが、翌日、「浙江省の教会本部の勧めによれば、浙江省の温州以外を訪問できるか」という返事が届き、まだ事態が完全に収束していないことが判明したので、断念した経緯がある。

後にわかったことであるが、実は上記の回答から間もなく、浙江省は省全体が海外団体の招待を中止されてしまったのである。

「熊本日新聞」(2015年8月5日)は「中国、キリスト教会弾圧 浙江省で数千カ所 十字架撤去、建物破壊も」という見出しで、浙江省の麗水地区における教会の弾圧について報道している<sup>2</sup>。その報道はこれまで中国のキリスト教の動向について楽観的な立場を取ってきた筆者にとっても衝撃的であった。

本稿では、第一に、浙江省のキリスト教の現状を中心に、政府の宗教政策の動向と教会の対応。

第二に。今回の中国訪問を踏まえて、中国の基督教の今後の課題について展望する事を試みる。

## 2. 浙江省の基督教の現状

### (1) 事態の深刻さ

2014年4月27日の温州における三江教会の事件<sup>3</sup>からのこの一年余りの間に、基督教教会が受けた被害は、温州地域に限らず、浙江省全域に蔓延している。この時の教会への弾圧が2014年8月に中止されたことは、実は一時的なものであったことが、今回の中国訪問で明らかになった。筆者は2014年の論稿における楽観的な推測<sup>4</sup>、つまりこの弾圧の一時的な中止は事件の収束に向かっている、という推測は、実は誤っていたことがわかった。教会堂の破壊や十字架の撤去はその後ずっと継続しており、現在はその第二波だと言われ、二番目のピークを迎えている。

その一つの例として、2012年9月22日に浙江省の省庁がある杭州市の文教地域に新たに建てられ、敷地1万5百平方メートルで5000~6000人を収容できる磐石堂教会を挙げたい（写真-1）。

写真-1 磐石堂教会（中国・浙江省）



出所：中国福音時報（2012年9月19日）

写真前方の右部分が会堂であり、教会の名前の「磐石」は土台の石の意味で、石の形に設計されている。後方左部分は教会の総合ビルであり、その上に十字架がある。しかし、2015年6月19日、この十字架は政府によって強引に撤去され、現在は存在しない。この教会はその母体である杭州の崇一堂教会とともに、政府の信仰の自由という政策を象徴し、世界にアピールしたものであった。

起工式には、現在の教会の全国のトップが参加し、献堂後、台湾から有名な説教者を招き、3日間の特別伝道集会も開かれた。このように公式に海外から宗教の講演者を招くことは、政府の特別な許可がなければできないことであり、この教会の建設は始めから終わりまで、一貫して政府の許可の下で進んだものであった。このような教会ですら、政府によって十字架が撤去されることは避けられなかったのである。ここに事態の深刻さがある。

知人の中国人クリスチャンによれば、事件翌々日の説教で、牧師は教会堂の土地使用証明書と不動産の所有証明書のコピーを会衆に示し、「磐石堂の建設は完全に設計図面を遵守し、法律・法規の違反は少しもない。」と公言していた。この牧師の説明の中で、最も力点が置かれたのは、教会堂の建設には法律法規の違反は少しもないということであった。なぜなら、政府の教会堂破壊と十字架の撤去は、常に法律・法規の違反を理由としていたからである。

この磐石堂事件から、政府の行動が必ずしも法律・法規に基づいて行われたのではないことが明らかである。確かに、磐石堂事件は杭州市での初めての事例ではなかった。2014年8月13日には、1000人収容可能な鼓楼堂の鐘タワーの十字架が撤去されており、十字架の撤去は一年前にすでに浙江省の県庁所在地まで蔓延していたのである。鼓楼堂は比較的小規模の古い教会であるのに対して、磐石堂は杭州市の代表的な新しい教会である。磐石堂事件の背景には、浙江省政府の強い政策意図がうかがえる。

## (2) 弾圧の強化

「熊本日日新聞」(2015年8月5日)に取り上げられた中国キリスト教の被害地域は、浙江省の麗水であった。麗水は浙江省の金華地区に位置する。この金華市の基督教三自愛国運動委員会主席の包牧師と妻邢牧師一家が逮捕されたが、理由は着服であるといわれる。自費で教会を作ったことが着服の疑いにつながった。

また、浙江省のキリスト教への弾圧に深く関わった弁護士張凱氏とその助手劉鵬氏は、同年8月25日深夜に温州で警察に拘束され、現在はその消息が完全に絶たれている。張氏は37歳のクリスチャンで、北京新橋弁護士事務所所属の弁護士である。彼は浙江省のキリスト教の弾圧に関して30人の弁護団を結成し、法律の許容範囲であらゆる手段で、憲法に与えられた信仰の自由という権利を守ろうとした人物であり、今回の浙江省の十字架撤去事件においても、彼は深く関与した人物である、

今回の二つの逮捕事例から、政府によるキリスト教弾圧は、教会という建物だけでなく、牧師や弁護士の逮捕というレベルにまで達していることが明らかである。

表 被害された教会の特徴

特徴	内容
①教会の数が多	温州は福岡県と熊本県を合わせた面積より小さいが、被害された教会堂は判明しただけでも1200個以上。
②屋上には十字架がない	全部強引に撤去されたことを示している。
③壁面に十字架がある	全ての教会において、壁面には十字架がまだ許されている。
④村落の教会も多い	中心市街地だけでなく、周辺の村落まで、教会が数多く建てられている。
⑤大きな建物が多い	教会の規模が大きい。そして信者が多いことが想像できる。
⑥美しい会堂が多い	信者数が多く、献金その他で教会の財政が豊かである。
⑦会堂が良好状態	十字架が撤去され、会堂の一部が被害されても、宗教活動は継続されている。

出所:筆者作成

これまで十字架が撤去された数は数千個に達している（「熊本日日新聞」2015年8月5日）が、北京最大の「シオン」という非公認教会では、教会入り口の看板に1800個という記載されている。

今回の訪問で収集した情報だが、この一年半で温州地域だけでも、1200個以上の十字架が撤去されたといわれる。

今回、中国で十字架が強引に撤去された教会の写真を数多く閲覧した。その特徴は、表の通りである。

ここで特に表の中の1番目と7番目の特徴について説明したい。

浙江省の全体の面積は101,800 km<sup>2</sup>で、9,597,000 km<sup>2</sup>という全国の面積の約1%であり、日本の約2/7である。温州市は浙江省の11個の行政区画の一つで、浙江省の面積の約1/10弱を占め、日本の福岡県と熊本県を合わせた面積より小さいところで、被害された教会堂はすでに1200以上に及んでいる。

一方、日本キリスト教プロテスタント組織の中で最大の日本キリスト教団の教会数は、2011年の統計によれば、1725である<sup>5</sup>。中国の一地方で破壊された教会が日本キリスト教団の教会数にほぼ匹敵し、被害が決して小さくないことがわかる。ここには、温州におけるキリスト教の影響力の大きさがうかがえ、キリスト教に嫌悪感を持っている浙江省政府の指導者たちは弾圧をまず温州から始めたのではないかと考えられる。

また、会堂が被害を受けても、宗教活動が継続されていることは、中央政府の宗教政策に対する遠慮があると考えられる。

### (3) 政府の態度－国家宗教局との会談を通して－

現在は中国のキリスト教会にとって微妙な時期である。上述した浙江省の事例は、全国のキリスト教関係者に注目されているに違いない。

このような状況下で、筆者は周到な調査を期していたが、このことは政府側に難問を与えてしまったかもしれない。筆者の訪問は午前11時半に設定されていたが、この時間は食事の時間である。事実、国家宗教局の官員はレストランで筆者と会見した。筆者は以前2度そこへ訪問したが、2回とも午前10時ごろに正式の広い応接ホールで会見し、その後はレストランに移り、食事を招待された。

従って、今回のプログラムは異例だったと言わざるを得ない。言い換えれば、会見の時の話を緩めるために、正式の会見用のホールを用いなくて、良い雰囲気のレストランをわざわざ用意したのではないか。しかし筆者にとって、政府官員との正式の会談はあくまでも得難い機会だった。結局、筆者は政府側のこのような好意的配慮を顧慮せずに、食事中に「熊本日日新聞」を持ち出し、この難しいテーマに入った。

筆者の政府の宗教や信教の自由について政策の変更があるかという問いに対して、政府の官員は①政府の宗教政策は絶対変わらない、②浙江省の不適切な施策で海外のメディアに口実を与えてしまい、過大に報道されたと回答した。そして筆者に「あなた自身も温州に行き、自分で確認してください」と提案した。これに対し、筆者が「元々行くつもりであったが、(浙江省の教会本部に)断られた」という苦情を述べると、官員は一方的に「それは断るはずはない」と発言した。

筆者はこの昼食を交えた短い会談を通して、政府の宗教関係部局の官員が中央の政策と地方政府の強引さの板挟みになっている無力さが感じられた。

#### (4) 浙江省の宗教政策の現状

2015年7月、浙江省は宗教建築に関する新しい条例を制定した。それは十字架についての厳しい規定であり、十字架は必ず会堂の外の真正面の壁面に付け、割合は主体建築の1/10を超えないと定めた。このことは十字架が屋上に付けられず、建物の壁面にしか付けられないことを意味する。言い換えれば、新たに制定された規則を根拠にすれば、今後の教会建築は違法か否かを問わず、浙江省全域で容易に十字架を撤去できるようになった。

なぜ十字架は屋上に許されず、壁面には許されるのかについて、筆者は次のように推測する。すなわち、仮に十字架が屋上の一番高い所にあるならば、遠くから見える。温州のように教会が密集している地域では、密集している赤い十字架も目立つだろう。そして、キリスト教に違和感を持っている政府官員は抵抗感を持つに違いない。しかし、壁面にあるなら、周りの建物に遮られる可能性もあるので、遠くからは見えにくい。この点で、浙江省のトップ夏宝龙氏は十字架を一番嫌っているという噂<sup>6</sup>を思い出した。

一方、十字架だけを撤去し、会堂を宗教活動のためにそのまま残すことは、信教の自由という政策に相当配慮していると言わざるを得ない。それはこのように例えられるであろう。人は力を持って仇を激しく殴っていても、仇を殺せない。なぜなら、人は法律に拘束されているからである。もし、人を簡単に殺した場合、法律によって責任を追及されるからである。

現在の浙江省における弾圧もこの例えと類似している。つまり、事件における政府の強硬さが見られるが、実は中央政府に配慮している。例えば、中央政府が結局どのような決断を下すのかという警戒心である。言い換えれば、浙江省政府と中央政府の間にギャップがある。現在の浙江省政府に左傾化傾向があるとしても、中央政府レベルでの宗教政策を無視することはできないはずである。

### 3. 中国キリスト教の危機

#### (1) 宗教活動への影響

なぜ筆者が浙江省の動向を注目しているのか。なぜなら、中国の「文革」<sup>7</sup>後、初めて公認教会に手を出した地方政府が浙江省だったからである。公認教会とは、ただ政府に認められただけではなく、政府の一つの構成メンバーである。従って、現在の浙江省政府のように、自分の政府の仲間である公認教会を叩くことは、考えられないことである。

このような状況下で、中国の一部有識者はキリスト教が浙江省の宗教政策の影響を受けて、「文革」の状態に戻るという危機感を抱き、悲観になっている。それは宗教に限らず、政治上でも「元に戻る」としているのではないかと憂慮している人も多い。噂の域を出ないが、中国の建国以来の60年余りの期間で、後半の市場開放政策は前半に比較して、失敗だと思っている人が共産党幹部の中には少なくないと言われる。これは現状の30年以上の改革を根本から否定する考えである。

一方、現在弾圧を受けている教会にも宗教活動は継続している。2014年夏の訪問時、同年4月に政府に取り壊された温州の三江教会においても宗教活動が絶えていなかったことを確認できた。新しい会堂に移転できず、従来で続けていたのである。しかも、現在多くの十字架が撤去された会堂においても、その多くで宗教活動が制限されたという報告はあまりない。

ところで、政府の官員の中に、キリスト教より仏教に親しい人が多いという見解が一般的である。また教会を弾圧した時、仏教僧で政府に協力したことが、人々の間で伝えられている。このことは、政府の宗教政策がバランスを欠いていることになる。

30年前、筆者が中国在住の頃、地方の宗教担当のある政府官員が語った言葉を明確に記憶している。「私はどっちの宗教にも入っていません。宗教に対する信仰を持っていないことは宗教を軽蔑するどころか、宗教に公平公正に対応することになるからである」と。ところが、現在の浙江省の施策は、決して公平公正とは言えない。あえて好意的な表現で言えば、「厳しい躰」をしているということになる。

## (2) 政府との闘いへの憂慮

ここで重要なことは、弾圧されている教会がそのまま屈服していないということであり、十字架の撤去に対して様々な抵抗が続けられていることである。その中には、抵抗によって、政府が撤去できなかった事例や繰り返して十字架を三度まで立て直した事例もある。

教会の前では、「憲法の尊厳を保ち、信仰の自由を守ろう」、「十字架はキリスト教の信仰の神聖的なしるし!」「国家の法律を遵守し、理にない強引的な撤去を反対!」「国家の法律の踏みつけることを許さん!」などを書いた横物の布を貼りつけた写真を入手した。そこには、その下に大勢の信者が30センチくらいの赤い十字架をそれぞれ持ち上げながら座っているという抵抗活動の様子が写っている。そこからは平穏的な雰囲気が読み取れるが、実際にその抵抗活動がその後どこまで進展したのかは不明である。

また、このような出来事もあった。政府が信者の抵抗によって一回目の十字架撤去が失敗し、それは教会側の大きな勝利とされたが、政府は教会堂そのものを違法建築として、十字架だけではなく、会堂全体を取り壊さなければならないという結論を出した。そして、その準備段階として、まず教会へ断水断電を始めたという。この事件の顛末についても不明である。

以上の事例から、政府が依拠している違法建築という論拠は簡単に変えられることが明らかである。また、教会の抵抗活動の中で、政府は公安部門による監視カメラを教会に設置しようという情報も流れている。

このように、浙江省における教会と政府との対立は次第に激化する様相を呈している。政府側も教会側もこの闘いが続くと、悲劇的な事態が招来されるかもしれない。しかし、一方が若干譲歩することによって、事態が好転する可能性はある。ここで言う譲歩とは、例えば、中央政府の現在の曖昧な態度をやめ、浙江省政府を抑制することである。あるいは2015年秋の習主席の訪米が成功を収め、アメリカと友好関係を確立できるかによる。米国との関係悪化は、中国国内のキリスト教がますます厳しい迫害に直面することに繋がるのではないかと憂慮している。

このことは政府側に依存するが、教会側はどのように対応すべきであろうか。

2011年にある非公認教会の当事者は、設立して10年ほどの信徒数1500人~2000人規模の非公認の守望教会、万邦教会が北京と上海でそれぞれ取り締まられている点を踏まえて、筆者に次のように語ったことがある。「(この事件は)教会のリーダーにとって、一つの教訓となったのではないだろうか。つまり、教会がいくら大きくなったとしても、政府と対抗できる力を持つようになったという思いは傲慢である。だから、私が作った教会はすべて50人の規模である」と。つまり、政府との闘いを避けるべきであるという見解であった。

このことは政府がいったん政策を決定したら、教会は政府と抵抗できないということの意味し

ている。逆に、政府はさまざまな配慮をすべき立場にあることから、単に事態を流血によって強硬に解決するという立場をとらないことは明白である。

## 4. 非公認教会の現況

### (1) 北京の非公認教会

前述のように、中国全土で見れば、キリスト教の置かれた状況は浙江省などを除けば、概ね良好である。例えば、北京の公認教会、非公認教会ともに教勢は順調である。

写真一2 シオン教会の廊下



出所：筆者撮影（2015年8月13日）

今回の現地調査では、北京の非公認教会を一つの対象とした。訪問した教会の一つはシオン教会である。北京最大非公認教会と言われている。大きな雑居ビルの3階全部を占め、教員数は1000人規模で、自己流の神学院も有している。写真一2は、その教会の廊下で左右を撮ったものである。そこから教会の大きさがうかがえる。

この教会はいわゆる地下教会ではない。公開しているからである。このように大規模化した教会がなぜ政府に取り締まられなかったかについては、「政府のやり方が理解できない」という意見が聞かれた。同じ北京の守望教会が融和を強調していた胡錦濤政権下で取り締まられたのに対し、現在の強硬といわれる習近平政権下では許されているのかという疑問が解けないからである。

ところで、北京では非公認教会はこの一カ所だけではなく、非常に多く存続している。ただ規模がシオン教会よりかなり小さい。今回の調査では、北京のもう一つの非公認教会を訪れ、未信者向けの英語集会に長時間参加した。教員数は100人規模で、英語集会には40人弱が参加していた。この教会は半公開になっていたが、その理由として、次のような点が挙げられる。

雑居ビルの一角を占めるこの教会の扉はガラスで、その上に新約聖書のヨハネ福音書3章16節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という言葉を刻まれている。そしてこのガラスの扉から、その中の壁に書いている「〇〇教会」という名称をはっきり見ることができる。たとえこの教会を一般に公に宣伝しなくても、このビルの業者や警備員にとどまらず、政府もそれが教会であることを熟知しているはずである。このビルの中にもう一カ所の非公認の教会があると聞いたが、未公開であった。非透明材質の扉が閉じられ、内部を覗くことはできなかった。

このような非公認教会には共通点があった。それは案内の人がいなければ、誰もがこの教会の活動に参加できないことである。この点だけでも、いくら公開しているとしても、「地下」であるという意識が依然として残っていることがわかる。



## (2) 非公認教会の人たちの見解

地下教会の存在について、案内役の非公認教会のメンバーは、筆者に「我々の教会は秘密で、政府に知られていない。なぜなら、ほとんど雑居ビルの中で開かれるからである」と述べた。雑居ビルには多くの会社が入居し、業種もさまざまである。社員だけではなく、業務のために客の出入りも多い。そういう場所では、教会を隠すことが可能となっている。

しかも、このような非公認教会というパターンは、時間の経過の中で普及してきた。また、このような伝道方法はイスラム教が支配的な中東地域でも有益だと言われる。

非公認教会のメンバーとの接触を通して、彼らが自らの秘密性に自信を有している点、彼らの伝道が中国国内に留まらず、海外、特に中東などでも応用されている点が明らかになった。ただ、筆者の案内役の「秘密で政府が知らない」という発言は、政府と教会の双方をある程度知っている人からは、政府に知らないことは絶対にないと反論されるに違いない。

この点について、筆者は「政府は知らないのではなく、黙認している。まだ政府の許容範囲にあるからである」とコメントしたが、彼らは認めなかった。そして、「それは黙認ではなく、必要がないと思って放置され、手を出さなかっただけである。政府は危険性を認識すると、躊躇なく行動するはずである。しかも、政府はいったん手を出すと、相手を絶対に完全に壊滅するまでやめないはずである」と反論した。

ここでいう「黙認」と「放置された」という言い方には、ニュアンスとしてどう違うのか、筆者には不明である。ただ、筆者に反論した知人は政府の主導性と権力を強調したかったのだと思う。

また、中国の基督教の状況を誇大し、楽観的な展望を持つことは、中国の基督教の発展にとって実に有害であると考えている人も多い。例えば、中国の基督教信者がすでに人口の1割を超えて1億5千万人に達したとか、30年後には世界最大の基督教国になるとかなどである。

従って、一つの推測、あるいは一つの期待を公言することは、すべての領域において共産党が至上の権威を求め、基督教に違和感を持っている政府官員にとって、反発の材料を与えることになろう。今回の浙江省事件は政府のその警戒対策であるかもしれない。

## (3) 公認教会と非公認教会

今回、中国のクリスチャンとの交流を通して、公認教会と非公認教会は「黒」と「白」、あるいは「地下」と「地上」と境界線をはっきりと引くことは無理であるという認識を深めた。例えば、上記に触れたように、4年前に取り締まれた当時北京の最大の非公認教会である守望教会の金牧師は中国公認の神学院に育てられた牧師である。そして非公認教会のリーダーとなった。

また、中国の中南部の大都市で、一つのビルの中に9つの非公認教会があるという情報を得た。公には写真館や音楽教室、心理相談室などがあり、特に、心理相談室には壁の一面に幕を掛けてあり、平日は心理相談室だが、日曜日には幕を開き、壁にある十字架を現し、教会堂になる。

注目すべきは、この9つの非公認教会の牧師がいずれも政府公認の神学校で育てられたことである。今でも神学校の兼任教師している人物もいる。また、弾圧を受けた教会の教会名だけでは、公認教会と非公認教会かの区別は不可能である。この点からも、公認教会と非公認教会を簡単に区別できないことがわかる。

## 5. 展望と課題

### (1) 習近平氏と浙江省

本稿の論点は、浙江省におけるキリスト教の弾圧の現状と、その弾圧がいつまで継続するのかという問題意識であった。ではなぜ、浙江省に注目するのか。第一に、浙江省が現政権の習近平氏の初任地であり、現在の浙江省のトップである夏宝龙氏は当時側近であった。したがって、浙江省の動向を観察することによって、習氏の政策を考察することができる。第二に、習氏が浙江省について明確な態度を示していないことである。習氏の政権になってからすでに3年目に入った。中国では、国家主席は一期5年、連続2期できる。そうすれば、この政権は10年間継続する可能性がある。その場合、後7年が残されている。今後の動向を注意深く見守る必要がある。

中国のキリスト教を全国のレベルで見た場合、必ずしも悲観的になる必要はない。例えば、浙江省で強引的に十字架が撤去されるという事態の中で、山東省寿光市で建設されている聖之堂教会では、大きい建物の上に十字架が設置されている写真にも接した。

「中国新聞網」(2015年8月18日)には、掲載の雲南省の省庁所在地である昆明市区の幹線道路脇に、リフォームされた教会堂の屋上に巨大な金色のイエス像が立てられたという写真が掲載されている。そのように目立つことすら許されていることから、雲南省のキリスト教に対する寛大な政策がうかがえる。

一方、習近平氏は2015年5月開催の中国共産党の重要会議で「経済発展と民族団結、祖国統一を促進させるために宗教を活用するよう」関係者に指導したようである<sup>8</sup>。ここで、注目すべきは、「宗教を活用する」という言葉である。問題はどのように活用するのかである。

ここには、習政権の宗教に対するアメとムチの両面の考え方がうかがえる。一般的には、宗教に飴(アメ)を与えて生かすというように理解できるが、浙江省の弾圧に着目すると、鞭(ムチ)を出しており、「宗教を活用する」とは必ずしも言えないからである。「熊本日新聞」によれば、「弾圧の背景として、教会関係者は習氏は仏教については伝統文化として保護姿勢を示しているが、キリスト教は西側思想と位置付けて警戒を強めているためだ」と分析したとされている。このことは、習政権がキリスト教よりも仏教に傾斜していることを意味しているのではないだろうか。

一方、首都北京のキリスト教は、緊迫状態になってきた浙江省とは対照的に、意外に平穏な状態にあった。ここから、習氏が今後どのような宗教政策に向うかは予測できない。

### (2) 今後の展望

ここで、イソップの一つの寓話を思い出す。一人の旅人のオーバーコートを抜けるために、冷たい風を一生懸命吹いても、この人は結局オーバーコートを抜けるどころか、ますますオーバーコートで体を包むのである。ところが、太陽が暖かい日差しでその人を照らすと、その人は自然にオーバーコートを抜いたのである。

中国への外交政策や交流のやり方もこれと似ているのではないかと思う。特に中国人の国民性を繋げて考えると、なおさらである。

現在の中国政府のやり方からも、中国人の国民性をよく見出せる。つまり、規則よりも人情である。良い関係だったら、何でも相談できる。一方で、敵対関係にあったら、たとえ理が相手にあるとしても、相手と敵対する。

話が少し逸れるが、日本のキリスト教の信仰の習慣から見ると、大体「新共同訳聖書」と「新改訳聖書」を使う二つのグループに分けられる。そのような区分に基づけば、中国のプロテスタントの信仰は、公認教会であれ非公認教会であれ、全部日本の「新改訳聖書」を使うグループに入れられる。また、中国へ秘密伝道している団体は日本の「新改訳聖書」を使うグループに属している人が多い。もちろん、異例もある。その同じグループに属しているある牧師が、約30年前からすでに中国の内陸の公認教会を応援し始めたのである。今夫婦二人とも、中国の内陸の公認教会で顔が広く、説教もたくさん許された。筆者の親戚もその妻の説教を聞いたことがあった。

そして、筆者がその内陸あたりの公認教会の本部を訪問した時、そのリーダーは、筆者が日本から来たと聞いたら、すぐ〇〇〇〇牧師を知っているか、と筆者に親切に聞くのである。この小さいことから、彼の長い間の伝道に実を結んだと分かった。

なお、中国大陸によく秘密伝道している団体は、世界の著名伝道者ビリー・グラハムの仲間であった。そして、前者が中国で作り出した教会は殆ど政府や公認教会に敵意を持っているに違いない。ところが、ビリー・グラハムだけが中国政府や公認教会と友好関係を保っており、中国の6000人の公認教会の会堂で説教することすら許されていた。この対比から、中国との友好関係の大切さがうかがえる。グローバルの世界である今、中国に良い影響を与えるために、友好関係を構築する必要がある。

一方、日本のクリスチャンが中国へ旅行するならば、是非日曜日を重ねて中国の公認教会で礼拝して欲しい。礼拝に行った人は、礼拝を通して充電できるし、訪問された教会も交流によって励まされるはずである。このような交流が深まれば、中国のキリスト教会への貢献が期待できる。このようなことが、現在、さまざまな課題を抱えている中国教会への支援になるのではないだろうか。

それこそ、中国教会への一番良い支えだと筆者が思う。

加えて、中国のキリスト教が、順調に発展できれば、それは必ず中国、さらには世界平和にも貢献できるはずである。

## 注

- 1 黄大衛「現代中国のキリスト教についての一考察」九州ルーテル学院大学『V I S I O』2013年、「中国におけるキリスト教の信仰の自由—中国教会の実態調査を通して—」『V I S I O』2014年。このほかに、筆者は以下の報告を行なっている。「熊本日日新聞」「中国のキリスト教」上・下（2014年9月12日、2014年9月13日）。
- 2 「熊本日日新聞」2015年8月5日。
- 3 前掲、黄大衛（2014）12頁。
- 4 前掲、黄大衛（2014）15頁。
- 5 日本基督教団公式サイト。
- 6 前掲、黄大衛（2014）14頁。
- 7 1966年に中国の全土で起こった「中国の文化大革命」を指す言葉である。
- 8 前掲、「熊本日日新聞」2015年8月5日。